

令和3年度第2回

早稲田大学所沢校地B地区自然環境評価委員会

会議次第

日時：令和4年3月29日（火）

15時00分～

場所：早稲田キャンパス大隈会館

N201・202

1. 開会・あいさつ
2. 議事
 - (1) 前回評価委員会議事録の承認について
 - (2) B地区におけるモニタリング調査の結果について
 - (3) A地区における照明施設環境アセスメントの終了と取組結果について
 - (4) その他
3. 閉会

令和 3 年度第 2 回 早稲田大学所沢校地 B 地区自然環境評価委員会

日時：令和 4 年 3 月 29 日（火）15 時 00 分～17 時 10 分

場所：早稲田キャンパス大隈会館 N201・202

出席委員：A 委員長、B 委員、C 委員、D 委員、E 委員

1. 開会・挨拶

○評価委員会事務局（F）：それでは、定刻より 2 分前ですけれども、皆様お揃いのようなので、「令和 3 年度第 2 回早稲田大学所沢校地 B 地区自然環境評価委員会」を始めさせていただきます。本日は年度末で、しかもコロナがなかなか収束しないという状況の中で、前年度の年度末には危ないのでこの会議も開けなかったのですけれども、前回所沢校地で行われた際には皆さん又お集まりいただき、また本日も改めて顔を合わせてお集まりいただき、ありがとうございます。今年度も前回からのナラ枯れの問題ですとか、外来種の問題、これまでに色々と議論されている継続的な課題、さらに、所沢校地をとり巻く狭山丘陵の豊かで恵まれた広域的な環境条件があるわけですが、だからと言ってこのままだと生物多様性の維持が難しいという現状や、大学の担う役割等も踏まえて引き続き活発なご議論をいただければと思います。議事に先立ちまして、早稲田大学の G 総務部長のからご挨拶いただければと思います。

○早稲田大学総務部長（G）：皆様こんにちは。ただいまご紹介頂きました、早稲田大学総務部の G でございます。日頃から本学の諸活動について、ご理解とご協力賜りまして誠にありがとうございます。また本日はご多用のところまた年度末のところ、先生方にはこの場にご出席いただきましたことに、重ねて御礼申し上げます。大学ではつい先日の土曜日と日曜日に卒業式が行われました。コロナ禍において大変苦勞した学生たちですけれども、学部から博士課程まで 1 万 819 名が巣立ったところであります。また、今週末には入学式を控えておりまして、まさに人が変わる季節を迎えております。さて、本「早稲田大学所沢校地 B 地区自然環境評価委員会」ですけれども、通例年 2 回、早稲田キャンパスと所沢キャンパスで一回ずつの開催をさせていただいております。本日は早稲田大学キャンパスに足をお運びいただきました。本日の委員会では、B 地区での取り組みにかかわる意見交換に加えまして、各団体の皆様と取り交わしをさせていただいております「確認書」に基づき、A 地区周辺における環境アセスメントにつきましても講評をいただく予定でございます、なおこの A 地区の環境アセスメントにつきましては、昨年の「東京 2020 オリンピック」におきましてイタリアの代表選手団が事前キャンプに使用いたしましたけれども、キャンプ中に陸上競技場の照明は使用しなかったということですので、こちらの取り組みにおいては今回を持って終了となる旨をお伝えしております。こちらにつきましましては、3 年の長きにわたりましてご審

議ご講評いただきましてありがとうございました。それでは、本日は限られた時間で
はございますが、どうぞよろしく願いいたします。

- 評価委員会事務局 (F)** : G 部長、ありがとうございました。本日は委員 5 名の全員ご出席
いただいておりますけれども、毎回オブザーバーでご出席いただいている「所沢市
みどり自然課」と「埼玉県みどり自然課」は、本日所用で欠席との連絡をいただい
ております。議事に先立ちまして、本日の資料を確認させていただきます。会議次第 A4
サイズ 1 枚、前回の議事録、自然環境調査室の報告書資料、環境保全センターによる水
質調査結果、埼玉県生態系保護協会が担当した報告書資料、A 地区の環境アセスメント
資料、以上が本日の資料になります。可不足ないでしょうか。それでは、この先の議
事は A 委員長に、お願いしたいと思います。

2. 議事

(1) 前回評価委員会議事録の承認について

- A 委員長** : 前回の所沢キャンパスでいろいろ議論が進みまして、充実した内容だったと
思います。今日は本年 2 回目、今年度の終わりの締めめの委員会になりますので、どうぞ
宜しくお願いいたします。今日は、皆さん全員ご参加いただけたので幸いです。それ
では議事次第にしたがって、前回の評価委員会の議事録の承認について、事務局より
ご説明をお願いいたします。
- 評価委員会事務局 (F)** : はい。これにつきましては、2 週間ほど前に各委員の先生方あ
るいは県と市にも送っておりますが、本日までのところ、修正等のご連絡はいただい
ておりません。何かこの場でありましたらご意見していただきたく思います。
- A 委員長** : 記載内容に気になることや修正などはございましたでしょうか。大丈夫でし
ょうか。そうしましたら、この内容でご承認いただいたということにいたします。

(2) B 地区におけるモニタリング調査の結果について

(公財) 埼玉県生態系保護協会 (H) : 説明省略

【質疑応答】

- A 委員長** : ご説明ありがとうございました。ご質問、ご意見宜しくお願いします。
本題とずれるのですが、手元の資料で、p.35 の植生管理について (ススキ) と書いてあ
るページ、一番下のところで、関東で火入れと草刈がどのように行われていたかという
過去の文献が書かれているのですけれど、これは関東では初夏というと、具体的にいつ
頃を指すのでしょうか。
- (公財) 埼玉県生態系保護協会 (H) : これは 5~6 月という形で記載されています。
- A 委員長** : 秋は草刈、9 月頃ですか。
- (公財) 埼玉県生態系保護協会 (H) : はい、9~10 月ということ記載がありました。

- A 委員長：一冬中そのままにしておいて、枯れた状態から下のほうに新たな個体が出てきたあたりで、火入れをするということでしょうか。
- （公財）埼玉県生態系保護協会（H）：そのようです。私有地のリファレンスエリアでも一年に一回刈だけのようなのですが、大体9月から10月に刈込をしているようです。初夏に火入れはしていないようですけれども、それで十分に多様なススキ環境が維持できているということだと思います。
- A 委員長：私が関わっている朝霧高原などは、2月下旬くらいに一斉に火入れをするんです。土の表面がモノトーンの世界になった後に、しばらくするとキスミレが一斉に芽吹きます。火入れをする時期は、それが普通なのかと思っていましたが違うのですね。
- （公財）埼玉県生態系保護協会（H）：一点補足説明ですが、これまで湿地のエリアでは、全体で希少種の分布をみていましたが、今年度から水田エリアに限定してやっています。ちょうど自然環境調査室が3年ごとに水田耕作を回していくということをやられています。2018年から私たちのほうで希少種の分布についてそれぞれ水田ごとにポイントを落としています。中流水田の9～11番が水田耕作を始める前から記録を取り始めているため、今後適したサイクルでの維持管理方法を、どの時期に水田耕作をしているら希少植物の生育にとっては良いのか、サイクルの状況が何年くらいで希少種が消えてしまうのか、といった点でも見ていくことができるのではないかと考えています。
- A 委員長：資料の取りまとめで、個体数が大幅に増加したということが前提にあって、丸の大きさがだいぶ変わりましたよね。ヘラオモダカなんかは中流水田で2020年一番大きいので19個体以上、2021は71個体以上、それが同じ大きさの丸になっています。これはなんというか、誤解をしますよね、説明がないと。同じに統一すると見にくい図になってしまいますか。
- （公財）埼玉県生態系保護協会（H）：見にくい部分が誤解を招きそうだったため分けてみました。区分を細かく分ける形になったため難しかったので、その年ごとでまとめる形式になっていました。誤解を招く形になってしまったかもしれません。
- A 委員長：増えてきたということが伝わればいいのですが、それをカットする形になっているので、今後表現をご検討いただければと思います。種の入替えはありながら、豊かになっているということですか。
- （公財）埼玉県生態系保護協会（H）：中流水田が一番わかりやすいのですが、5～8番が水田耕作をしてから年数が経っていますが、それによる変化が、希少種を見ているだけでもある程度差が出ているということが見て取れます。今後、水田耕作前の段階から見ていくことで変化がもう少しわかりやすくなるのではないかと考えています。水田耕作を始めた年は、ヘラオモダカだけになることが多い、もしくは優先していた種がすこし残るくらいになります。翌年になると、出てくる希少種が変わってくるとい

うことが、今の時点でもある程度見て取れます。また、水田ごとで優先する希少種が少し変わっています。多様性が埋土種子を含めて水田ごとで違いがあるのではないかと。これを水田ごとに見ていくことでもう少し詳しい生育状況の違いがわかってくるのではないかと考えています。

- A 委員長：雑木林の管理のほうにつながりを持つということも含めて、ある地域全体でどのくらい豊かなのが重要な視点です。一つ一つの場所の生育状況は変わってくる。種組成が違っていても問題はなく、トータルとしてどうなのか、一定の広がりの中でそれが豊かであれば、継続的に維持できるという視点があります。水田も同じように、ローテーション3年おきにやるとすると、そういうローテーションで湿地全体が維持されるということが見えてくると、生物多様性の評価として非常によろしいのではないかと気がいたしました。
- E 委員：E です。前回委員会を欠席となりまして大変失礼いたしました。次回所沢の現場を見させていただきたいと思います。いま、生態系協会から、省力的管理の進め方を開発したいというところで、長年のデータが蓄積されているということのご紹介がありました。テクニカルな話は専門ではないので、非常によくデータを取りまとめて、経年的な移動や推移をよく分析されていると思います。4 ページに前回説明があったということですが、所沢市の「生物多様性ところざわ戦略」というものが出されており、早稲田大学の B 地区はまさに狭山丘陵だけでなく所沢市全体の中でも主要な環境の一つということになるので、ここでの取組事例、生物多様性モデルは、所沢市の戦略全体にも貢献する非常に重要な情報になってくるのではないかと思います。B 地区の点で始まったことが、だんだん面として広域に波及しつつある。所沢市全体の地図をこうやってみると、緑の部分がだいぶ分断されてしまっていますが、それを今後つないで自然再生することを考えていくになると、今回の植生復元や省力的管理方法の開発、I さんからは順応的管理という言葉が出るかもしれませんが、ここで早稲田大学が試みていることは非常に重要な意味を持ってくるのではないかと、と私は見えています。質問ではなくコメントです。以上です。
- B 委員：私も同じことなのですが、グラフで点のサイズが 2020 年と 2021 年で違うということ、もう一つの例えば 7 ページの中流水田でいうと、点のサイズがヘラオモダカ 1-4、5-18、19 以上というようなサイズの凡例と、実際の水田のところにドロップされている、例えば 19 以上というのはいないわけですか。それとも、縮小しているのですか、そのところをわかり易くすると良いと思いました。
- （公財）埼玉県生態系保護協会（H）：点については、図にしたときに小さくなってしまっているのですが、小さな点と中ぐらいの点、大きな点があり、どの数のエリアに該当するかを示しています。サイズの調整をして、もう少し見やすくしたいと思います。
- 早稲田大学自然環境調査室（I）：先ほどの水田の管理につきまして、ページの 15 ページに対応する図がございます。やはり 3 年に 1 回程度水田耕作をすることで、特に水田の

水稲随伴種といわれるような希少種が戻ってくるのが明らかになっています。一方、我々の管理自体は、3か所を3年でローテーションするため、実際には6年放置することになります。そうするとかなりヨシが戻ってくるため、ここは我々のやり方にも改善の余地があると考えています。3年たったところで、軽微な攪乱を入れる等、今後の計画の修正を検討しています。水田ごとで出てくる種が違うというのは、いくつか原因が考えられますが、一つは水田の水位面の変動が異なるため、そもそも植生が微妙に異なること、もう一つは、水の流れが水田同士で全てつながっているわけではないため埋土種子が均等に散布されずに、種の出現パターンが異なること、が考えられます。ただ現状の方が水田ごとに景観が違いますので、それで良いのではないかと考えています。今後の希少種などの出現の状況を見て、やり方を都度検討できれば良いと考えています。

- A 委員長：関連して確認すると、作業量として6年放置すると、復田するのは大変なことになりますよね。ということで、種が多い少ないとは別の課題として、どのくらいの作業量でまた元に戻せるのか、というような視点も調べておくことが良いと思います。
- 早稲田大学自然環境調査室 (I)：おっしゃる通りで、完全に6年放置すると、現在の広さの水田一枚を元に戻すのに、調査室の人力で約半年かかります。今はおおよそ3枚の水田で稲作をしていますので、一年半か二年くらいかけて戻すような状態です。6年に一回というのは、復元の労力の点からも少し長いと感じています。3年に一度程度で、刈り払いか軽度な伐根などの管理を行うことが現実的なものかもしれません。以前、生態学会で、水田の回復ポテンシャルについて言及がされていて、放置すればするほど、正比例で上がるのではなく、ある年限を境に回復にかかる労力が指数関数的に上がるということでした。おそらく6年だと遅く、その分岐のところを見極めていくことが今後必要だと考えています。
- C 委員：今もみなさんが質疑応答していたわけですが、B地区でこういう自然環境を操作するための研究なり作業を続けてきているわけですが、この地区が埼玉県あの地域の、周辺にはあまり残っていないのかもしれないが、どのくらい代表性があるのかということ、常に意識する必要があります。もう一つは、色々な試験をやっていますが、その普遍性、管理をどう風にしたらこうなるということ、少なくとも所沢のこうした環境だと、どのような管理をどれだけ作業をすれば、例えば3年に一度伐根して管理をすればこういう多様性が保たれるという、普遍性をかなり意識しながら進めることが重要であると思います。具体的には、先ほどIさんがおっしゃった15ページの水田のところ、休耕田、水田の管理、これは今までのいろんな方の研究を踏まえて作ったものだと思いますが、所沢のここだとこういう風になります、管理をこうすればこうなりますよ、じゃあどれがいいんですか、というような提案をできるところに向かっていくことが良いと思います。ススキに関しても同様で、いろいろとやっ

ているので大事なところが見えてくる、それを所沢市民に、どれが皆さんにとって生物多様性に取り組む時に豊かだなということを示せたら、これはまさに大学が進めている、プログラムだということがうまくアピールできるのではないかとことを思っ
て聞いていました。

- A 委員長：ありがとうございました。それでは次に、自然環境調査室のご説明よろしく
お願いいたします。

早稲田大学自然環境調査室 (I)：説明省略

【質疑応答】

- A 委員長：ご説明ありがとうございました。興味深い内容が報告されていますけれど、
誰でも構いませんので、ご意見ご質問をお願いします。
- B 委員：面白い報告がたくさんあったのですけれども、まずはカヤネズミが増えている
ことに安心したんですけれども、飯能に点在する小さな湿地でも、B地区と同じよう
にここ3年くらい全く見られなくなって、今年というか昨年度ちょっと回復気味になっ
ていて、まったく環境や広さは違っているのに、同じような傾向が見られたのはすご
いなと思います。今までと調査期間・体制は変わらずという条件での、今回のデータ
なののでしょうか。
- 早稲田大学自然環境調査室 (I)：はい。調査の期間は変わっておらず、調査体制につい
ても私が中心に行っている点は変わりありません。あとは調査補助の学生たちの入れ
替わりが多少ある程度になります。
- B 委員：続けて、ククイムシはショックだったのですが、大径木で下草がないところに
被害が多くみられました。そういう管理を、狭山丘陵では多くやられているのでちょ
っとショックです。大径木で、下草がある無しでやはり差は出るのでしょうか。
- 早稲田大学自然環境調査室 (I)：B地区では下草が繁茂しているところでは、感染の数
が低い印象があります。
- B 委員：何かそれについて原因、関連が考えられましたら教えてください。
- 早稲田大学自然環境調査室 (I)：一般にククイムシは正の走光性があるとされており、
相対的に光度が低い藪には向かいづらいと言えます。またこれはあくまで現場での印
象ではありますが、ククイムシの穴をあける場所はそこまで頭上の高いところで開け
ず、比較的低い高度で飛翔している印象があります。その飛翔空間がササ藪となっ
ていることで、藪が飛翔を妨害するような結果にもなっているのではないかと考えてい
ます。
- B 委員：それと、センサーカメラが興味深かった。ネズミ sp.となっていますが、ネズミ
は種まで同定できなかったのでしょうか。
- 早稲田大学自然環境調査室 (I)：動画の画質では、アカネズミかヒメネズミかはわかり

ませんでした。

- B 委員：キツネはネズミが多いところに必ず生息します。走行性の鳥類とネズミとが安定して出てくるのは面白い。キツネの出現データはありますか。
- 早稲田大学自然環境調査室 (I)：出現のデータはございます。ただ、一年半で 11 例と全体の数が少なく、出現の傾向がみられるほどではありませんでした。
- D 委員：もっと大きな話として、生態系保護協会が取りまとめたモニタリングが非常に大変なものだと敬服しますが、モニタリング調査の結果については、やはり、その価値を積極的に発信をしていくべきだろうと思っています。E 先生がいらっしゃるため、環境教育の場でどのように活用できるのか、地域との連携や保全活動にどのように役立てるのか、あとは大事な早稲田大学の、教育研究の場としてどのように効率的な利用ができるのか、その辺の議論がこれから増えていくと良いのではないかと感じました。細かい話ですが、先ほどのオオムラサキの調査のことで、近隣との現地調査を同時に一斉にやるところが多いのです。できるならば、狭山丘陵の地域全体で、同時に一斉調査を実施する。、そういう調査方法も面白いのかなと。地域を巻き込む形にもなりますし、興味深いデータが得られるのではないかなと。去年からオオムラサキはずいぶん減っているのですが、減っている中で早稲田大学校地のエノキで確認数が多いというのはやっぱりそれだけ良好な自然が存在しているんだろうなと思います。加えて、A 地区にもエノキがたくさんあるのですが、A 地区の駐車場の奥に確か、13-15 本くらいあったと思いますが、そこも調べてみる必要があるのではないかと思います。蝶々というシンボリックなものですので、面白いデータってアピールすると良いと思います。
- A 委員長：長年モニタリングをされてきて、オオムラサキとか、ゴマダラチョウの分布の特性なんかが明確になってきました。ここで取り組んできたことが、他の方や地域に伝えられるレベルに集積されてきたことから、情報発信をどういう範囲で、どういう形でアピールできるのかというのは、重要なご指摘だったと思います。関連して、質問があります。ゴマダラチョウとオオムラサキも、発見数の推移のグラフがありますが、これはオオムラサキが特に 2013 年度に 0 になっています。これはなぜでしょうか。
- 早稲田大学自然環境調査室 (I)：これは当時の 1 月だったと記憶しておりますが、大雪が降って春まで雪が残った場所が多く、調査の実施自体が難しかったと記憶しております。
- E 委員：非常に緻密にデータを重ねているので大変興味深く拝見させていただきました。昨年、一昨年度はコロナの関係などで、なかなか市民参加の活動は対応も大変だったと思いますけれども、活動参加者数が一定程度あったところは驚きですし良かったと思います。引き続き基本的に、この活動は学生、留学生、職員を対象にしていたと思いますが、キャパシティーの問題もありますが、どのように市民にまでさらに

対象を広げていき参加者を増やしていくかが課題になるのではないかと思います。このB地区のフィールドが、環境教育の場として重要だとする野外活動の地道な努力が、10年後20年後の所沢の環境全体にも非常に大きく関わってくるのではないかと強く思います。もう一点、A地区もB地区と同様に里山環境として重要なので、このようなA地区の調査も非常に重要だと思っています。半分くらい出現率が外来種だということですが、そういう意味では生物多様性を改善する活動の中では、なかなかしっくりこない現状だと思います。難しいと思いますが、アライグマだけでなくイエネコなんかは、何個体くらいA地区で見られるのでしょうか。出現頻度はわかるのですが、個体数は何個体くらいか。

- 早稲田大学自然環境調査室 (I) : 識別できるのは現在のところ3頭です。これは体毛の種類からほぼ間違いないかと思います。夜間の赤外線撮影では判別が難しい個体も含めると、おそらくプラス1~2頭いるのではないかと考えています。
- E委員 : 最大5, 最小3,4くらいではないかということですね。外来種なので、例えばカヤネズミ、ノネズミ類に被害を及ぼすのであれば、場合によっては積極的な駆除も将来的には必要なのではないかと思いつながりながら聴いていました。ありがとうございました。
- A委員長 : ノネコに関して、最近捕獲して殺すのではなく、里親に出すということを各地でやり始めており私も手伝っています。一方で避妊手術をして、もとにいた場所に戻すということも行われていて、それは継続的に調査すると、最終的にはいなくなっていくと思います。ただ、それをやると生きている限りは鳥類をハンティングしてしまうため、捕まえて里親を探すほうが良い手段かと思えます。協力する団体にコンタクトをとってやってみるといえるのはいかがでしょうか。今私の家に、御蔵島から来ているネコが8頭います。60何頭捕まえています。ほとんどがきちっと飼ってくれる里親に手渡すことができます。一部なつく個体は、猫カフェに出演したりという個体もあります。
- 早稲田大学自然環境調査室 (I) : A地区脇の湿地は大学の敷地ではないため、まずは周辺の団体の方々への情報共有からになると思います。イエネコの件に限らず、良い形でトトロのふるさと基金の方々が両生類や哺乳類のための水場をつくってくださっているとありますが、例えばアライグマが出やすい場所に水場をつくると、むしろ逆効果になるということになりかねない。情報共有をきちんとやらないといけないと思います。
- C委員 : 6ページ目6枚目のスライド、OECMという考え方、2010年くらいから国際的には出始めた、特に2018~2020年にポピュラーになって多分まだ十分に知られていない理解されていない概念。その辺のところを上手に強調しながら、保全をするなり生物多様性の維持を図っていくのであれば、うまく宣伝することが必要なんじゃないかと思えます。宣伝という意味では、先ほども話しましたが、発信することがとても大事。特に、長いプロジェクト研究をしてきたので、非常に貴重な財産がたくさんある

と思います。それを上手に発信するということが必要で、大学として非常に重要な財産だと前から話しているが、発信するとしても色々な方法があるわけです。ただ、Iさんの組織とか事務局のところで発信に力を入れられるかという、そういうことではなく、やはり大学がある程度そうした人材に対してお金をかけ、週に何日かやるような、プロの人なら凄く上手にできる。そのコンセプト等をIさんや事務局と話し合っ
て進められる人材が大学にいれば一番だが、そうでなければ新たに雇うことも頭に入れて進めていく必要があると思っています。そうすることにより、E先生がおっしゃる通り、地域を巻き込んだ形での調査を行い、そのデータをうまく活用できるのではないか。いろいろなイベントや活動をするときも、そうした発信でもって人を多く集められるのではないかと。その辺を意識できたらいいなと思います。Iさんたちの蓄積等を発信するためのプロを雇ってやったほうが、そういう人が大学にいれば一番いいが、そうでなければそうした人を雇うということがあっても、決して調査室にとっても大学にとってマイナスになることはないと思います。

- A 委員長：質問と、それから感想があります。ナラ枯れのご説明と写真をいくつか見ましたが、黄色いテープが巻かれている木が何本かありますが、これらは感染している木ですか。比較的若い木でも、感染しているものもありますか。
- 早稲田大学自然環境調査室 (I)：左の写真の右側のテープは、調査の時の目印に使ったものです。申し訳ございません。紛らわしくて恐縮です。データとしては、若木で感染しているものはほとんど出ていないです。0%に近いです。
- A 委員長：そうですか。感染木の分布が出ていましたが、これは萌芽更新した若いところの林分は、白いポイントがないということでしょうか。
- 早稲田大学自然環境調査室 (I)：はい。そうなります。こちらは常緑ではないので、冬場の写真のため下まで見えますが、白い点はないということになります。
- A 委員長：それから、最後のほうの、赤外線カメラの情報 A 地区の湿地ではミゾゴイの記録はありますか。
- 早稲田大学自然環境調査室 (I)：ありませんでした。
- A 委員長：私も複数の場所で水辺にカメラを仕掛けて撮っていますがびっくりするくらい場所でミゾゴイが出てきています。狭山丘陵にもいるはずなので、出てきていないかなと思ったのですが。
- 早稲田大学自然環境調査室 (I)：狭山丘陵の別の場所で記録されているということでしょうか。
- A 委員長：いえ、三浦半島や富士山の西側の大学の施設でやった結果です。ミゾゴイが出ることは、想定していなかったもので。それから最後に、感想としてヨシを刈る工夫を長らくしていただいていた、最近を残す場所とある程度高さを維持して刈るとい
うパターンを見せていただきました。個人的で恐縮ですが、バンディング調査をやらせていただいているので、きっとこういう残し方は、季節によって鳥がヨシ全体を刈

ってしまうよりはかによく集まってくるのではないかと思います。私が主体でやっているわけではないのですが、いつ頃どんな鳥類がゲットできているかということはデータとしてあるのですか。それが刈った場所との関係でどんな場所なのかな、というちょっと鳥獣保護連盟の研究員の友人に確認してみようと思いました。バンディング調査ができれば良いのですが、なかなか難しいです。

- 早稲田大学自然環境調査室 (I)：鳥類センサス自体は毎週行っておりまして、刈り払わず残したブッシュの中は、カシラダカやアオジ、シジュウカラなどが大量に集まってきます。
- A 委員長：霞網を張ってつかまえると、とんでもない鳥が来ているのですよね。ラインセンサスで記録するのは、質の違うデータがバンディング調査で取れると思います。全体的な取組みに対してのご意見、個別に対してのご意見、それぞれ伺いましたけれども。こちらに関しては、他になれば以上とさせていただきます。最後は、水質検査の調査報告をお願いいたします。

早稲田大学自然環境調査室 (I)：説明省略

【質疑応答】

- A 委員長：この点に関してはよろしいでしょうか。時間も少しオーバー気味ですので。三番目の議事に移ります。

(3) A 地区における照明施設環境アセスメントの終了と取組結果について

(公財) 埼玉県生態系保護協会 (F)：説明省略

【質疑応答】

- A 委員長：ご説明ありがとうございました。この件は、報告となります最後になりましたが、本日はオブザーバーの方が来られていませんので、「その他」について他に何かございますか。

(4) その他

- 早稲田大学総務部環境安全担当課長 (J)：本日は、お越しいただきありがとうございました。私からは人事上の報告をさせていただければと思います。本学の自然環境調査室におきまして、来週から新しく嘱託職員が一名追加となり、I さんとともに、自然環境調査業務に従事することになります。博士号をお持ちの方で、先月まで学部大学院教育に従事しておられた方になります。今後の人事については本日はご説明できないのですが、I さんに置かれましては本学の専任職員ということで、今後ジョブロ

ーテーションの可能性があることについて、申し添えさせていただきます。よろしく
お願いいたします。

3. 閉会

- A 委員長：ありがとうございました。これで議事は最後になりますので、司会進行を事務局にお返しします。
- 評価委員会事務局（F）：長時間にわたり、ご議論いただきありがとうございました。本日の結果では、B 地区につきましては関心の高い課題がだいぶありました。たとえば、カヤネズミについては、一時は絶滅かという状況だったわけですが、ヨシの管理等の成果があったのかもしれませんが、復活してきていることが報告されました。ナラ枯れについても、どういう傾向のコナラが被害を受け易いのか等、I さんのほうから提案もございました。ここで行われている早稲田大学の取組みというのは、全国的にも最先端の取組みであると思います。世界的にも、C 先生から話しのあった「OECM」という新たな民間の保護地域をどのように保全管理していくか、環境省では来年度から認定制度を発足する予定になっていますけれども、そういった取組みとのリンク、あるいは今年開催予定の生物多様性条約締約会議で採択される「30by30」という 2030 年までに国土の 30%を保全管理された場所にしていく国際目標ですとか、「ネイチャーポジティブ」という積極的に生物多様性を改善させていくための責務を社会の様々なセクターが担っていくという新たな概念も示されております。この委員会の役割、あるいは早稲田大学としての取組みというのは、ますます国際的な観点からも社会的な重要性を増していくのではないかと、そう思いながら議論を聞かせていただきました。活発なご議論をいただきありがとうございました。「令和 3 年度第 2 回早稲田大学所沢校地 B 地区自然環境評価委員会」を、これにて終了いたします。